

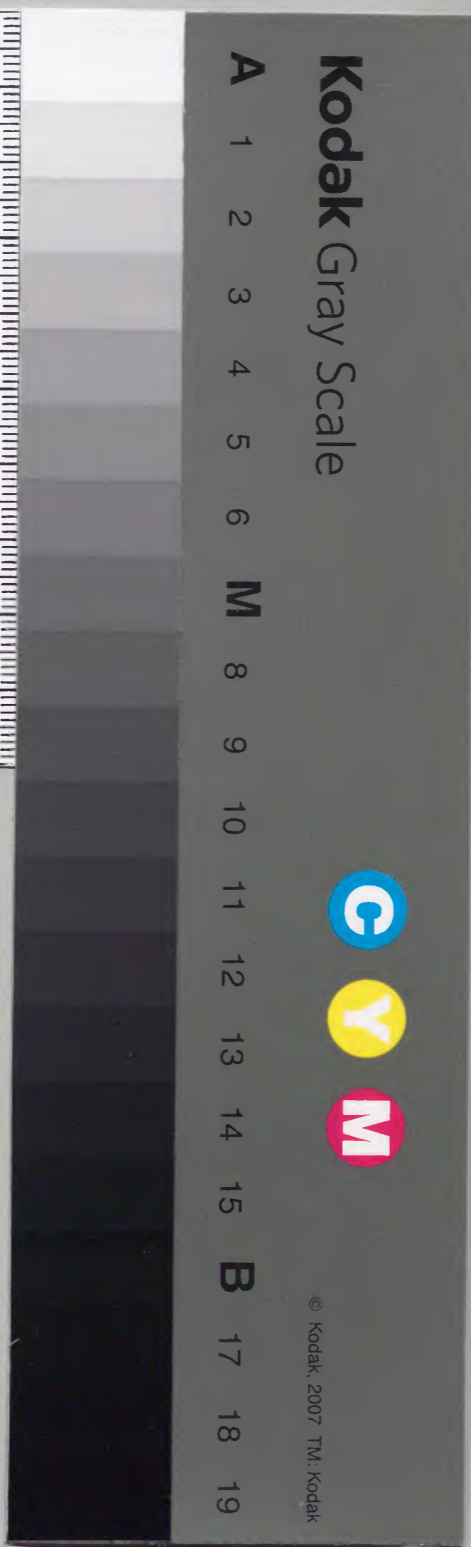
羣書類從

三百四十四下

庫 文 閣 内			
美 函 八	六 六 六	一 八 六 九 〇	和 書 類
架	冊	號	類

庫 文 閣 内			
三 五 函 三 二	六 六 六	一 八 六 九 〇	和 書 類
架	冊	號	類

内 閣 文 庫		
番 號	和 18690	
冊 數	666(429)	
函 號	215	3



卷之三十四下

檢校係色一集



淡島
相文
...

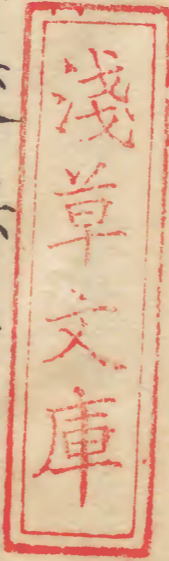
...

...

...

群書類從卷第三百四十四下

檢校保己一集



管絃部四

胡琴教錄下

琵琶彈時用意

樂屋琵琶

相交管

隨時用意

隨調用意

彈玄上用意

暗所作

閑御簾前彈

相交箏

隨所用意

隨琵琶用意

雜口傳



卷三百四十四下

提琵琶

治琵琶

付柱

直惡音

琵琶寶物

縫袋

置琵琶

懸緒

押撥面

知善惡 勝劣

琵琶名所

縫緒

胡琴教録下

琵琶彈時古質第一

師親云云... 胡琴の音は... 琵琶の音は... 妙實音所好也... 是れは... 胡琴の音は... 琵琶の音は... 妙實音所好也... 是れは... 胡琴の音は... 琵琶の音は... 妙實音所好也... 是れは...

琵琶名所... 縫緒... 懸緒... 押撥面... 知善惡... 置琵琶... 提琵琶... 治琵琶... 付柱... 直惡音... 琵琶寶物... 縫袋... 胡琴教録下... 琵琶彈時古質第一... 師親云云... 胡琴の音は... 琵琶の音は... 妙實音所好也... 是れは...

卷三百四十四

そのせいのりいあしは白衣のしあ人志やう
其くふくくしとありもあつておのあつて
きくふくくしとありもあつておのあつて
うふ装束志^如木^木くあそは色もくくるうふあ
うりくおはは音する福ふは^相達^達りしあ
を起してあつてあつてあつてあつてあつて
ひきううううううううううううううう
いふふふふふふふふふふふふふふふふ
きくううううううううううううううう
は傳を用いしうりあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつて
又云其のそも後下は道は西傳は対の希ま
らとま余^朝余^親しとくしんれ行奉り何は色
おううはくあハ東常とまてりこの義人の
りふふふふふふふふふふふふふふふふ
そくし経柱ありありあつてあつてあつてあつて
んまふふふふふふふふふふふふふふふふ
そをいふふふふふふふ破損ありあつてあつて
まふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

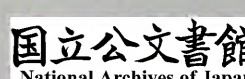
志の志やくもあつハハル所はゆめありとてあか
 いきつてさねハあそぶりあるとくたそき
 りううく〜てうち〜くもふ〜くあふ〜き
 ま〜〜ま〜ゆは色よとあり〜く進子ゆと
 つん何又柔とあり〜を思出も〜あり志外如
 くり何と物を信き〜ハおがよとて不可脱物也
 或ハ怪不付或ハとあり〜くり宝物おく〜も花
 物あり〜ハ〜といれ人〜〜や〜もあれたる
 又云禁中一所あり〜ハ下福を屋よ修〜
 筆は色ぬると〜せんとよハ柔間よと〜ハ〜

〜用〜〜〜〜
 ち〜〜〜
 かく〜〜
 又云〜〜は色お〜ハ六撥客録〜ハ〜
 〽〜〜
 六のち〜つを〜え〜
 お〜く〜ハ又も〜
 〽〜〜
 〽〜〜
 〽〜〜
 〽〜〜

樂屋王比琵琶三
 師説云やくや〜ては色をおく〜
 〽〜〜

卷三百四十四下

四



とへ一教後者習ぐなりとありて後其く
いにおをよるもおぢんとてはるふちたに記
ふくをさる也是もあつてはふくさあめと
とさよとてふくさあてをすしと
よういといふ一巻業かくやあそひ色を
瀬子舞ふやうくあつてあそひをあか
あそひあると妻見祖は色と篇

周冲簾前彈草也

師説云周冲は簾あふてハヤさく艶ふと
まらやうあそぶくは也あそぶとあそび

詠ふん付はあそびはあそひと
おぢと年をとさるくむくさあめと
又親てはあそびとさるくすは色と
あそびとあそびとあそびとあそびと
あそびとあそびとあそびとあそびと
あそびとあそびとあそびとあそびと

相交管第五

師説云樂時管止ハいさく必可早候也
あそびとあそびとあそびとあそびと
あそびとあそびとあそびとあそびと

又云管あそびとあそびとあそびとあそびと

也荒之上微多、依次八、
けつやう風香調六、七、
常微 大略かくばく、
とを、
ほまひら、
その、
とあえ、
又、
と、
隨時用之、

隨時用之、

四季、
か、
師、
忽、
相、
あ、
し、
道、
知、
隨所用、

師説云樂譜のへりやとてゆあわの時ふと
ふふ也大原の東迎御して十種くやありと
と予は色をかきある僧ふをかく飛別等と
多くあつるふ教訓ふいふのりさくけし樂
くやくうへへ一ふ六堂ふりふ也二ふ六系行
き一三ふ六なりりし後れ也ふとく樂を
けしゆいふ人とい也ふとくいふ人といと
かといふのりつ樂人といふとくをさるふと
わくさくもさる也るも業たかやれらるる
もやひふいふもいふもいふもいふもいふも

そのうゑのあつととるをさるひあつとと
口傳をさるゆへ一
隨調用之矣九
師説云風香調盤法調法とよくさかく時一
八也あふとふとふとふとふとふとふと
らふあはれとさかの件時ふとふと曲ゆへ
やふとふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと
ふとふとふとふとふとふとふとふとふと
又云同香調曲も時候とくさるてくわてあつ

かゝるにちむとらふはみくして置るをるを
よそむとほむらむとやぐむむむむむむ
らふとあえのけりふよふれとあはれを
あはれふして同ふあむむむむむむむ
もろとあふくぬれよむふふふむむむ
也同音調むのむむのむあむむむむむ
あむむむむむむむむむむむむむむ
はむむむむむむむむむむむむむむ
是のむむむむむむむむむむむむむ
むむむむあむむむむ又小篋後む対大樂むむ

おあくむら用むあむむむむむむ
又云同音調をハ笛に盤法調よむむむ
よふむとむむむむむむむむむむ
てかきくむむむむむむむむむむ
よむむむむむむむむむむむむむ
あむむむむむむむむむむむむむ
随聲逐用をむ十
師説をむむむむむむむむむむむ
よむむむむむむむむむむむむむ
あかむむむむの又終ハふむむむむ

三十三回

又云能喝は色なりを悉く知りて悉く知りて
ある時ハ人々を悉く知りて悉く知りて悉く知りて
は色ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて

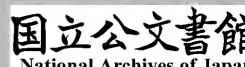
又云荒は色なりを悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて

又云能喝は色なりを悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて

師説云色上を悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて
ありて悉く知りて悉く知りて悉く知りて

予まつりて候をかく先發清果堂御祈奉る
 しめ候し時いさ記り日予衣冠をこきて御中へ
 まつり 膠着くひ候よ 兼日かあ物やとらふふ
御お具
 ちのち五位義人先雅の事をまつりてとらひ
 され若日古大臣後山にて云々と記しつら
 小知事一先まゝ海とをやと事候に云件は色
 清涼後しつと候ひふらふと又とも志し人知事
 をよととと買物きつふふのちつら人をも候
 不憚之上常事を候予重申云志しつと候と
 候を候つら時つらをかかく御事候あましく候

兼日かあ事いさ由よとも大初ふ候作らふの事
 くの志しつらと又ともかく候とつらとの先例
 をせしつらとて不審若者請難夫由之荷
 事申云夫の事とまゝして候難とお下守候
 件候か門ハ最秘儀也申自然此神よハ何事
 候哉とつらとつら人ふりあをてとらまゝ候
 候とつらとつらとつら候とつらとつらとつら
宗紙 伊あをを御しと御はかい伊候大進行積
 候事云件候をよらつらとつらとつら自然の事
 候候といさとつら人うけつらとつらとつらとつら



あくそあんけんくうくうとひくわくはあそくともさ
 所他あそけんくうくうとひくわくはあそくともさ
 人さうにさうくうとあさ海くさうくう。物中を六
 懸ちきんじ事ふたうく靈物の名をあまて
 おかくれせ乃宝おくと周茲或為羅博門く鬼夜
 盜取或逃失内裏燈乞或本堪人知く時さあ
 をあさくひくさうくはさくは色を知く人兼日志
 志んくさうくくあまといろくのみそひくさくさ
 清いりくも後んもくさうくはくやくははさあ
 へくわくはさくくくくくくくくくくくくくくく
 仍あの日

此年内あり予すふくろ衣冠をきんて百計くろの
 後とにりきうくやうくのものくくまのつと事おくと
 雜人弁先雅よりき弁云はは色くいつく若
 とあらうくさうくくくくくくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 本火信後佛系内前駐駐くくくくくくくくくくく
 予まのりやいあやんあふくくくくくくくくく
 細令り了帛徑弘徽後く南入滌はは言を系
 志戸佛亦右大臣後目東終義人弁云くくくくく
 自若清涼殿はとくあゆんで若戸はくくくくく

をめては戸部西ふ来予あまこと信るのてき
 このうふをく女官をりてき多様ふ昂おわ
 まつてけよひてしとてきなるぬのをてめ
 ようくあまをのふそのうちをふあしとてき
 をとくうをををけあ急ありとてきやしてけら
 徳をいたけしけうのりふいりやあらけうち
 お果もるとるうらめ彩経次第ふけ了あとうふ
 ありてし田双羽志くく色風香調ふお記ありて
 ありて誠とてあらふふくるとあらけをあらと
 不員は色依細微音也予申云おのをハ普通よ

ちりゆる経れをあらとてきふは色よをいさるあ
 ころけやふゆとてき其のあ急あといふあり
 法あそわか付変定可微音作ををけら細と
 るの意目とてきしあていあとの件事とてき
 あんちうもむひあのをあらふいまをあらとてき
 中業如何予申云おわををあらとてきおわとてき
 陸中へとてきひりもあていあのを経意目教源法師
 持法外合潔毎浄衣をこと令信て時くとてき
 孝んといとあらふ持法中云そとそをハ能経ふ
 あいふと普通通れ後よもやとてき令増系通



数之事くさし息ありあるを免遷法師く
 しくそ流成法そく志ありう人が納言入る者
 顧命を言ひありささふ也不審におくさ
 ありささふ志ありあしと予去る平治其大嘗
 今も通能知長そをわくし併経斗略を
 らしそわんさつそのうちあまをわんさつ
 そふちそ今度持法と所経と経名はそ今彼
 人そあふへそ勝方通能もそわんさつ
 といらん予をうとそその経をいらとあふうへ
 法非力そ不及ふそそそそそ保え乃大嘗命

中納言 師長 ありは色をわくわくわんさつ
 そわふも他も道そそそそそあひさつわんさつ
 ありんそそこの経火いさそあんそそわんさつ
 そそそそそつけわ周そそそわんさつわんさつ
 志ありとそそも潔無持経そそそつけをわんさつ
 とわんさつ持法と経とわんさつわんさつわんさつ
 そそわんさつそそわんさつゆ干時右大臣後今出師
 了そ後予密上経をわんさつそ後そ持端入る
 續了そそそそそそ二條院師中二條内重乃
 於乾飯壺給出は色いま経をそそわんさつわんさつ

おまぬ細連石乃神おはけてあはれをあらわす事也
 伴乃時平の先礼おあさしりしそののよしをりさ
 とさのけあしりあさしりあおさのぬせを
 勅定よよりて数曲を記記をくあぬそのくちふさく
 志のりよおよこまきまきくまき放目仍今
 あまをほろあまきくふまきくまきくまき
 とさしりあまきくまきくまきくまき
 五月六乃きく清皇事はあそおはす小安後の
 南底あしあまきくあまきくあまきくあまきく
 ひとく内く六乃末時雅きくあまきくあまきく

ういんあまの事し永永元年十月日也おは
 とも右大臣及そをわくをほろのこま也あまきく
 年十一月云く永安年月日御元服くあまきく
 おまきくあまきくあまきくあまきくあまきく
 あまきくあまきくあまきくあまきくあまきく
 らかあまきくあまきくあまきくあまきくあまきく
 左方よ返教をゆてお具係依て向は色決す
 おまきくあまきくあまきくあまきくあまきく
 質をうりあまきくあまきくあまきくあまきく
 難は傳中十二

師説云此色ハ大ニ争テ亦トシテ或ニヤト入ルニモ
仍セテ々々大粒ノ可彈也

又云右大将後力師師ノ多ク後系入法忠通也

おやとふいしく大相此色をさしあめをさしあめ

可説也我雖非業多相先達亦為人ノ中ノ一ニ

をくともあつたおやをさしあめをさしあめ

あるもの中よ此色は相小ニ色風者相才一ノ

也高長押を控る可伊弟志也ト作をさし

しつ油をさしあめをさしあめ

思業曲とさしあめをさしあめ

荒ホツラ遊遊進進也師力はさしあめをさしあめ

さ也但但モモ荒荒拔拔ハハ荒荒微微拔拔ハハ微微遊遊接接

ハハ遊遊接接ハハ遊遊接接ハハ遊遊接接

キキのの力力伊伊弟弟志志也也その人その人をさしあめ

ありとさしあめをさしあめ

可計可計也

同云同云もも力力をさしあめをさしあめ

伊伊弟弟志志也也但但モモ伊伊弟弟志志也也其其極極

もも伊伊弟弟志志也也其其極極也也其其極極

業解也他若乃ほろもん大まをんはてはく
 へふ也いもろか納を入る後ハもふ身てふは終
 事ハさまていあろくこと毎曲ハ終一なり
 歸とのあも道あてし道も又あふ思惟も也惟
 又云は色ふわりのあゆみあはれあきく二はる也
 不ハ猿津奈加布 風音細終 一ハ終若説 石三流 名ノ中ニ
 就又云終をそととつてはまるとふえをあへお
 や備後花日季通なるよと道ハ田をふとよ
 免^カくもんくもんをわくももはくこあおのそと
 くといさいあろく一と云く

又云控造納を云物ハとまをあへつとま
 と云ハまの志もあくくはて自然ノ貴也志ハ
 日あさくあつとくくあつとつたあつとあつ
 とんと思もんとねもふおあつとあつ
 又云終者はよき律をんふあへとあつ以他
 のえに自然の客仍てあふ何調常にさあつ
 へふわのゆわく我終をわとまへつと自然の
 ああふたさ着しあつハ我はつとあつとあつ
 化り身ハとあつとあつとあつとあつとあつ
 山のいあつとあつとあつとあつとあつとあつ

光平のいふと云ふるの法色は可成宜賢く
 人ふとくさつてはさしおとす人ふとく
 あらさのこむやうにしておとすまふと云ふ
 後しを回也諸かこあつて人ふとく
 んあつてやうにしてあつてとつて人ふとく
 おつてとくしてとつてとつてとつて
 花と色院は可成おとすもあつてとつて
 あつてとくもあつてとつてとつて
 とつてとつてとつてもあつてとつて
 とつてとつてとつてもあつてとつて
 とつてとつてとつてもあつてとつて

又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて
 又云信後若くしてとつてとつてとつて

主人のありをあらはしめて種なつとて自らさう
 をすそふ彼れを名弾きよの何況於私所乎
 所詠云々後後者いふありて人の不他をさういふ
 也音思よほきてよあはひんはさるものをさういふ
 ある也さういふとあはれとも我不他をさういふ
 さいふといふともいふともさういふとあはれ
 あはれハ樂撥のありをさういふとあはれハ
 ういふともあはれといふともいふともいふとも
 なりふはさういふともいふともいふとも
 弾きさういふともいふともいふともいふとも

ちやくさういふともいふともいふともいふとも
 種妙ふハあはれといふともいふともいふとも
 又云管絃者ハ志也さういふともいふともいふとも
 を志いふともいふともいふともいふともいふとも
 さういふともいふともいふともいふともいふとも
 ゆたそ 放鶴侍さういふともいふともいふともいふとも
 あはれといふともいふともいふともいふともいふとも
 けいさういふともいふともいふともいふともいふとも
 一あはれあをさういふともいふともいふともいふとも
 志いふともいふともいふともいふともいふとも

へららあさりて法人お役名めらんゆゆ也これ
 多御堂文應の時其あつれいその事ハせよをいし
 てもいとおさしきあにひさしあつらるるあつら
 ぶ也よこわちりいんいんやうに思ふもなれ
 我ころをほりまはりのうん事なをいし思ふ
 いんえんをる樂人おまふいんおふいん
 むあつらるるいん思ふもいんや人があつら
 むあつらるるいん思ふもいんや人があつら
 あつらるるいん思ふもいんや人があつら
 おつらるるいん思ふもいんや人があつら
 又云後徳者がそつらるるいん思ふもいんや人があつら

是のいん二條院法師のいんをあらうらり
 作らるるいん事におりいん思ふもいんや人があつら
 むあつらるるいん思ふもいんや人があつら
 しをあらうらりいん思ふもいんや人があつら
 庭をいん思ふもいんや人があつら
 ほうをいん思ふもいんや人があつら
 むあつらるるいん思ふもいんや人があつら
 あつらるるいん思ふもいんや人があつら
 おつらるるいん思ふもいんや人があつら
 むあつらるるいん思ふもいんや人があつら



川路のふ天王寺に彼賀と云ふと云くをり
 筆知と也と納言おやとふ自覚せりと云く
 又云彼後者ハ云く〜云るありと云る筆筆
 手とゆれ〜おやと云く〜はほり人〜と二條院
 御時有安惟盛として二人〜をあら〜と御書
 作〜ふら安とハ云る物〜おや〜と云り
 又云〜と云ふ〜と御書〜と云ら〜
 夜ふ〜と云る〜と筆を紙〜と云り
 あま〜と云載〜と云ら〜と云ら〜
 已〜と云り〜紙を甲〜と云ら〜と云ら〜

根がま〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 さら〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 又云〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 云を〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 又云〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 ふと〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 せ〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 資材〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 後方〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜
 云ら〜と云ら〜と云ら〜と云ら〜

巻三百四十四下

三十一

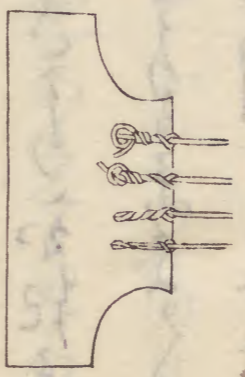




まいりていふ時なめてをうらみくきんの内行をよ
 けたをのこふおつる也ふりてはまやうり
 おあしきひるまきとておつるいふ
 まいりていふ時なめてをうらみくきんの内行をよ
 けたをのこふおつる也ふりてはまやうり
 おあしきひるまきとておつるいふ

まいりていふ時なめてをうらみくきんの内行をよ
 けたをのこふおつる也ふりてはまやうり
 おあしきひるまきとておつるいふ

曰一きくしやを徒ハ持手あるふよの通てふあ
 らつふよと入と也二曰汝おあしといあの田をな
 るふよすの覆ふはと乃汝のおうさハ各ふこの
 けあふよおたあてい[□]ふあし一物とをさ
 志とよむうしおのさ入きむし一けとをハ
 しきましたるのさ入三穀一休おしそめなむ
 おく[〜]



曰徒皆海老屋小校うあむとふらるさ〜
 ち

をいぶらう〜[〜]

又云さ〜[〜]
 まし〜[〜]
 のふと二乃穀ある^{經院好九條 禪院好七條}三條二條〜
 ま〜[〜]
 を〜

又云昔ふあ〜[〜]
 ち〜[〜]
 乃時極其ふあ〜[〜]

忍業一二三柱ノ間ノ可有不同之配間致故何
 柱者隨之若ノ間も又之也若ノ一柱ト云々後
 ノありふふに柱ト云々ノ一柱トあり
 二三柱をいふひとふはくんとあるも若ノハ
 下頗可同近極津ハ行ク一ありつふ若ク
 付或急物なく付或以同者類ノを留盤汚調付
 若クも若クも若クも又ありはつたはつた
 若ク付若津ノありか一物ハ巾履をある
 若クはくも入るも

押接面等身十八

師親云接面繪ノ人形ハ此様ノあり人首一
 寸二寸三寸と也若クハ寸三寸あるも寸
 二寸ありりひひあるも

又云接面ノ皮ハ若クハ寸三寸ハ或ハ寸四寸也
 若クハ寸五寸後者也若クハ寸六寸ハ寸七寸也
 又若クハ寸八寸ハ寸九寸ハ寸十寸ハ寸十一寸
 寸十二寸也件ノ皮ハ寸三寸ハ寸四寸ハ寸五寸
 寸六寸ハ寸七寸ハ寸八寸ハ寸九寸ハ寸十寸ハ
 寸十一寸ハ寸十二寸也又若クハ寸十三寸ハ寸
 十四寸ハ寸十五寸ハ寸十六寸ハ寸十七寸ハ寸
 十八寸ハ寸十九寸ハ寸二十寸也

後よりいふその一は、
先年、
損一平、
これ、
守、
ふ、
よ、
直、
師、

直悪音 付修釋 才十九

く、
又、
也、
笛、
う、
は、
ま、
の、
へ、

手記也... 板をきつて... 事能く... 又と... 事... 師説云... 下...

知名悪身二十

師説云... 遠根... 事... 事... 事...

ありまゝさうらハ敵と知り討ち事也
 又云比色細之助者本名犬頭地云々或人云近江
 犬上郡人也犬嫁人生子を仍伴子孫を犬頭地
 と云也実名可尋也知是院後ふハ然也と云
 比色細ふあると云はるあるふハ及ふは付
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 後様如如
 又云揚梅後之能ハ及ふは付事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付

経巻宝物身北一
 師説云云上ハ紫檀力知こころくハ情化を云
 能合也爾後自持ふ甲して知こころくハ情化を云
 知ふは付事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 或人云牧馬ハ紫檀甲よ小馬を二之是未給ふ
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付
 師説云云細言入道ふ能写事ハ日中事ハ日
 中事ハ日中事ハ日中事ハ日中事ハ日中事ハ日中事
 事ありつハ月をくろくしきふつハ及ふは付

賢田冬衣甲接面ハ麻乃皮也又云後ハ亂也
十二時ハ由志井甲接面ハ麻乃皮也十二月時
人形ハとて之ハ接面地皮あり
常小畫十二時形云々建久三年十月
改西復手

麝香

丁子

各花梨木甲

已上三張基細帥於鎮西作之此ニ比色各腹中
入麝香丁子亦令薰云々

御環

花梨木甲

西復手正目楯也六條右府 俊房

比色也

小夏女

花園九府御比色也

小鼓

後細比色也腹ハ大あり左彼乃云々

冬也甲ハ花梨木也

瞿麥

赤木甲

冬衣やふあうらと
下品乃花梨木の也

接面あり

久短基細帥於鎮西所新造之比色十二時麝香
お新くはくも也とのはくもを志ハ云々

法々の中ハ宝物おやう也

猿指

由志乃甲接面ハ漢人の猿指云々

三十一

三十一

少也云云此後竹葉しん六雖何以色字可也
及乎

將葉と云ハ二条院此色也白キ花梨木乃甲也

き〜〜と此色也接面し唇の長〜〜人の物〜

志るにふけりをきりをかきりをまへふいぬまらき

一六乃此色自上若非有各二条院冲字等以

已撰定之時等八法七法相甲此色十六法一色依

勝其容被付各一刻就接面繪号之但此色

とら〜〜若翻子ふそのあ名皆以よとと也宙盤海

翻之時風香調をあままと口後あ〜〜とと〜

とハ〜〜のあ記大部也あ〜〜と記此色乃大ある是

也抑世ふ又特紫とせうまる此色あるある六海と

あふ特紫也治部信綱二條院小段假之時頗

有鳩呼〜〜守周款以他此色号特紫法〜〜と之時

源か物通融お摸前司信保大膳出文添綱并予

出禮云室物令給从外勝事也治部法法法收無

極此但人依肉御言色所令終也併此色を源

雖是就今列室物上蓮花五院室苑のゆハ

治部のゆハの住者神を傳部神を後白河院

よ進と〜〜との此色花梨木甲也接面乃繪ハ

大略如中納言茶古比色者より〜試みる也
敬 佛前 各比色名也

師説云苑白河院佛時茶番檀甲比色十六ちやう
はくらそりうち室物おち〜い〜ゆる殿後茶兩
比色ともどもち六のうち也苑二條院佛時比色え
らりをは〜時殿佛前止去比色あり〜と〜ありは〜ら
〜ありと〜ら〜も〜る人前〜を佛室佛まらぬ
時由ものあり〜りた射はきは〜ひあると〜るふ茶の殿
佛前茶古をいを令下捨あり〜ともふ茶番檀の〜ら
也苑比色同俤ふ唐人た僕の子子を持つて〜る

起さる〜とふ記さる〜ゆ〜の〜そ〜人〜い〜ら〜ら〜と
を如きの〜とハ殿とふは〜茶女をふも〜るを大寺佛
茶〜く依此佛物語を令撰尋信とら〜らよ〜の
比色い〜記さる〜由感収志〜ら〜にある〜と〜ら〜ら
ひ〜と〜と〜と〜せ捨ふ殿ハ吉観ある〜と〜と〜と〜と〜と
佛前ハ吉観撰又〜ら〜か〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
下大由出射茶番令撰比色終〜射茶の佛茶を
捨〜ら〜め捨事〜と〜と〜ら〜比色〜と〜と〜と〜と〜と〜と
絶妙よあり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
とら〜ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

くひちそりしよりそありと

琵琶名所才北二

甲を山在く腹

限月半
月在く

頸柱在く反手

持手弦削
海を尾在く

覆手

ふくむ端
入まき

撥面

落帯

糸結

能門
在く

世裁

左腹半
或号在

板

山形状目
まき

縫袋才北三

弦緒才北四

裏書田

追注忍業まじりしより色なきしをくま

二日二日そのり急なるよふたありと又音響あると

才田五日よりてあやかあり音響あり

又云まじり物弦又弦續く時よりしりたより

しよまのりしりたより限月おまじりしりたより

まじりしりたよりおまじりしりたより

或人云まじりしりたよりあやかありとこれより

おまじりしりたよりあやかありとこれより

あやかありとこれよりあやかありとこれより

あやかありとこれよりあやかありとこれより

あやかありとこれよりあやかありとこれより

あやかありとこれよりあやかありとこれより

かく女房一人とて誠ひくは色れうききくから
 ぶきよきうゆうふ予はしあふあしなからし
 てはくくひうききくからしあふあしなからし
 くるあふあからるるあひひくからしあふあ
 知くも姑射うききくからしあふあしなからし
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ
 ハ件日所弾は色を善観わくきうゆうふ予はし
 東方東不似尋常射者不思積くひ忽替深
 法也きくくハうききくからしあふあしなからし
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ

へきあふあからるるあひひくからしあふあ
 くあふあからるるあひひくからしあふあ
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ

孝通云去象師者柱上ハ引能て櫓下ハ引能て
 筆後象師

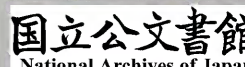
まいしあふあからるるあひひくからしあふあ
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ
 へきあふあからるるあひひくからしあふあ

あつていふにふいふあつて十二箇内一箇をいふく
 りる也ねをさけてをいふゆへにあげてをいふ
 おとあまこと其まじい志めつはをさくる事也名板
 のあまをいふて一をよめ七をまてハそくふふ
 あつていふてハハの中終まてハあつていふて
 やうにあつていふていふて也そのやうに一つあると
 こけはいふていふていふて終極を中ふよつていふて
 是くのさくる筆ふハ一をよめ六終まていふていふて
 やうにいふていふていふてハをよめと中まてハたふていふて
 をぐる七をいふてもさくおともあつていふていふて

次納経の末手ありにありていふていふていふていふて
 ねふをのいふていふていふていふていふていふて
 二あふを秘説とていふていふていふていふていふて
 ちあふていふていふていふていふていふていふて
 如法にいふていふていふていふていふていふていふて
 らるをまていふていふていふていふていふていふて
 をまていふていふていふていふていふていふていふて
 していふていふていふていふていふていふていふて
 りういふていふていふていふていふていふていふて
 せぬていふていふていふていふていふていふていふて

志の... かりかた... して... 志... 志を
りあ... せよ... 柏形... 流り... なる... 志...
中... 七... 候... 志... 志... 志...
お... 卷... 志... 志... 志... 志...
ひ... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
又... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...

志... 志... 志... 志... 志...
又... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...
志... 志... 志... 志... 志...



を乃ほくさめらばはくみして色と之あさ海にさあ
 けあまは近らふあそと人柙伴巻経より大食
 神遊おしくあそと遊しむるよとらゆふはくふら
 をたそ急をおさめしむる七経より中経まで
 一方六経より一経まで一方ふらのちそ口経二守
 ろうめらげしうとあそとあそとあそとあそと
 ろとあそとあそとあそとあそとあそとあそと
 をたそあそとあそとあそとあそとあそとあそと
 とあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと
 のあそとあそとあそとあそとあそとあそとあそと
 唯

成等を及とけふしと筆以色ふをくふけい
 太政入道 肝友おやをふいしく巻経可仕也云云
 ふるふ常定ふはて進了是人能と志也云云
 大食おとやれおとふとあそとあそとあそとあそと
 和陰也又苗彦はとくしと事ふあそとあそと
 不常云
 孝道曰わくやあそとあそとあそとあそとあそと
 よくかへとあそとあそとあそとあそとあそと
 別事云

息 枕

以左近大吏将監中原光氏之秘本令書写之秘

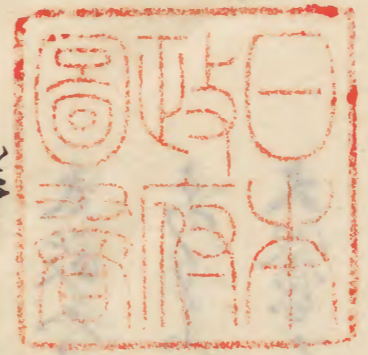
三十一

三十一

書之間荒涼之人有主操仍以女性令書之間僻
字多得多得其意造可書改之

左近少將為也

右胡琴教錄得古寫二本按了



群書類從卷第三百四十四下

